



Les Amis de L'Orgue de Tokorozawa MUSE



節分も終わり、暦の上では春の到来ですね。冬生まれなのに寒いのが苦手なので、本格的な春の到来が今から待ち遠しいです。さて、赤白青のフランス国旗と同じ配色が印象的な左のちらし、ご覧になって頂けたでしょうか？一瞬お菓子屋さんの広告を思わせるようなこのリサイタルの準備も、佳境を迎えています。鍵盤の重さも重量級のミュースのオルガンを弾き熟すために体力作りも欠かせません！みなさまもどうかお風邪などに気をつけて、年度末を乗り切りましょう！

🍏 3月5日（土）『パリの作曲家たちーJ.S.バッハへの眼差しー』ついに開催！！

所沢ミュースのホール・オルガニストに就任して、はや2年が経とうとしています。最近の『0歳児からの500円コンサート』では司会のみならず、歌声まで！？披露しておりますが（お恥ずかしながら…）、みなさまの温かいご声援やホールスタッフの皆様に支えられ、アークホールのオルガンの魅力を伝えていく働きが出来る事を幸せに感じるこの頃です。

この充実の2年目を締めくくる演奏会『パリの作曲家たちーJ.S.バッハへの眼差しー』が、いよいよ来月に迫ってまいりました！昨年はピアニストの岡田将さんをお迎えし、フランツ・リストの作品を通してオルガンとピアノの聴き比べというユニークな内容でお届けしましたが、今回はフルートとオルガンの響宴、バッハとそのバッハの音楽に熱い視線を寄せた19、20世紀フランス・パリの作曲家たちにスポットをあて、前回に負けない面白い発見溢れる、充実の演奏会をお届け致します！！一人でも多くのお客様に足を運んで頂きたく、今回はオルガン通信拡大版でその魅力をじっくりとお伝えしていきます。

【リサイタルのポイントをまとめると】

★オルガンといえばJ.S.バッハ、そのバッハの息吹がフランス風に甦える！？

☆1900年前後のパリでは頻繁にバッハの作品が演奏されていた、その知られざる真実に迫る！



★今回もゲストがとにかく凄い！👉日本を代表するフルート奏者、高木綾子さん

☆フルートとオルガン、意外な共通点が？！フルートのソロ演奏も聴ける。

★演奏会の聴き所、時代背景などを大スクリーンを使って分かり易く解説！

☆大スクリーンには演奏者の手や足さばきも鮮明に、奏者の息づかいまで伝わるような臨場感！

🍏 フランスにおけるバッハ演奏の歴史を徹底検証！フランス人もバッハが大好き！？



日本人も愛してやまないドイツ・バロック最大の作曲家ヨハン・セバスティアン・バッハ。ドイツのお隣に位置するフランスではどうでしょうか？

この二つの国は対照的な国民性を持つ事で有名ですね。宗派もプロテスタントとカトリック、祖先もゲルマン民族とラテン民族、がっしりとした体つきに合理的な思考のドイツ人、スマートな身のこなしで皮肉たっぷり即興大好きなフ

ランス人。これだけ違えばお互いに批判し合うこともしばしば。しかし、そんなフランス人も、**バッハが大好きなのです！**私がフランスに留学していた時、フランス人のバッハ好きには正直驚かされました。オルガンの演奏会のみならず、教会ではカンタータが演奏され、様々な分野で全曲演奏が企画される他、バッハの演奏に適した楽器の導入やドイツのレパートリーに長けた演奏家も沢山育ってきています。しかし同時に、フランスには『フランス風のバッハ演奏の伝統』が存在する事も知りました。やはり「良いものは良い！」と自国愛の強いフランス人をも魅了するバッハの音楽。今回のリサイタルでは、前半は主にバッハの作品のなかでフランスからの影響がみられる曲を、後半は19世紀後半から20世紀に活躍したパリのオルガニストたちの作品と、彼らによって蘇生されたバッハの息吹をお楽しみ頂きます！



🍏 バッハとフランスにまつわる エトセトラ

まずは生前のバッハ（生没年1685-1750）とフランスとの関係について。

バッハが活躍したドイツ中部と北部では、主にルター派のコラールを使った教会音楽が中核を成し、イタリアやフランスからの影響を受けつつもプロテスタントの信仰を軸にドイツ独自の発展を遂げました。一方、フランスではパリや王宮のあったヴェルサイユを中心に華やかな音楽文化が開花し、音楽好きのルイ14世（写真右）のもとオペラやバレエ、室内楽の宴、教会ではカトリックのミサ用に多くの音楽が作られました。対位法的で密度の濃い『ドイツ・バロック音楽』と区別して、その時代の音楽をフランスでは『フランス古典音楽』と呼びます。特徴としては、華麗な装飾音、舞曲形式、宮廷オペラから派生した情感溢れる節回しや鋭い符点の効いた序曲、イネガル奏法、多様な装飾音符などが挙げられます。ご興味のある方は映画『めぐり逢う朝』や、『王は踊る』をぜひご覧下さい。この時代のフランスの様子がとてもよくわかります！さあ、では、生涯一度もドイツを出た事がなかったバッハは、どのようにしてこれらのフランス趣味を習得したのでしょうか？



♪ バッハによるフランス音楽の研究♪



- 1710年頃、フランス人作曲家ダングルベールによる装飾音符の表を写譜し、フランスの装飾法を研究していた。（左図はバッハによる写譜の一部）
- フランス古典期最大のオルガニスト、ニコラ・ド・グリニーが1699年に出版した『オルガン曲集』を1713年にすべて自筆で写譜していた！

● 1717年、既に名声を博していたバッハは、当時フランスで最も著名だったオルガニスト、ルイ・マルシャン（右絵：ルイ王宮に仕えたオルガニスト）とのドレスデンの宮廷からオルガン対決の場を用意される。しかしバッハの実力に恐れをなしたマルシャンは、対戦当日、姿をあらわさなかったという逸話も！



このように、バッハはドイツに居ながらにして、手に入れることのできた楽譜やドイツで活躍したフランス人音楽家の演奏を聴き、独自の感覚でフランス趣味を習得していったのです。今回の演奏会前半の中でも、バッハの作品の中でPièce d'orgue（オルガン作品）とフランス語でタイトルが表記された『幻想曲ト長調 BWV572』やフルートとの『管弦楽組曲第2番』の舞曲様式は、フランスの影響を非常に強く受けた作品です。とりわけ前半の最後に演奏する秀作『パッサカリア八短調 BWV582』は、最初にペダルで奏される主題が、フランス人作曲家アンドレ・レゾンの作品に使われる主題と酷似しており、バッハの作品の中にはこのように沢山のフランス音楽からの影響がみられるのです。

♪ その頃フランスではバッハの音楽は演奏されていたのか?? ♪

一方フランスでは、その時代にバッハの音楽が演奏される事は殆どありませんでした。フランスやイタリアの音楽がドイツで演奏されることはあっても、ドイツの音楽がフランスやイタリアで演奏されることは少なかったのです。その理由のなかに、各国におけるオルガンの作りの違いが挙げられます。バッハのようにペダル鍵盤を駆使する作品はフランス古典のオルガンでは演奏が極めて困難でした。下の写真を見て下さい。左がフランス古典式のペダル鍵盤、右がドイツ式のペダル鍵盤です。鍵盤の長さが明らかに違うのがお分かりになるとと思います。フランス風のペダルは主に定旋律（グレゴリオ聖歌）を奏でるために使われる事が多く、バッハや北ドイツオルガン楽派の作品にみられる様な、独立したペダルのパッセージを演奏するためには用いられませんでした。



フランス



ドイツ

♪ フランス革命後のパリで変化が! ♪

フランスのオルガン音楽は1789年のフランス革命の前後でガラリと趣が変わります。この時代、自由を求める市民達は、階級社会を撤廃するため、国王や貴族たちはもちろん、権力の象徴とされた教会や聖職者達をも追放し、教会の中のオルガンさえも次々と破壊しました。そのため、フランス革命後数十年間、フランスのオルガン音楽はまさに暗黒時代を辿るのです。

その頃ドイツでもバロック時代からの反動により、人々は対位法的ではない優雅で軽やかな音楽を好むようになりました。その結果、バッハの名は一時的に音楽界から姿を消し、かのメンデルスゾーンがバッハのマタイ受難曲を聖トマス教会で再演したのが1829年の事。実に四半世紀ぶりにマタイ受難曲が甦り、バッハの音楽が再びこの世に息を吹き返した瞬間でした。フランスでもその暗黒時代を切り裂き、ドイツから聞こえてくるバッハの音楽を研究し、広めた一人のオルガニストがいました。**APF.ポエリー (1785-1858)** です。彼は、ドイツ式のペダルをフランスに導入し、バッハの作曲技法に影響を受けた作品を残すなど、フランスの人々にバッハの芸術を広めるきっかけを作った重要な人物です。

19、20世紀 花の都パリ、開かれるバッハへの眼差し

ボエリーによってバッハの音楽がパリ市民に少しずつ広められるなか、19世紀パリではオペラ人気が全盛



期を迎えます。ケルビーニらのオペラ作曲家が強い権力を握り、派手で誇張の多い表現がもてはやされ、音楽は衰退の一途を辿っていました。その危機的な音楽界の状況を打開するべく立ち上がった一人の作曲家がいました。それが**セザール・フランク**(1863-1890)です。フランクはパリ音楽院オルガン科の教授を務め、聖クロチルド教会のオルガニストとして、フランス近代音楽を牽引しました。ベルギーのリエージュに生まれたフランクは1873年、パリ音楽院の地位を得る為にフランスに帰化します。ベルリオーズらのフランス音楽に囲まれて生きる一方、バッハ、ベートーヴェンといったドイツ音楽を強く賞賛し、当時としては異質な存在感を放っていました。19世紀フランスにおけるオルガン製作の名匠アリスティド・カヴァイエ＝コルによる美しい交響的オルガンのもと、カトリックの信仰にもとづいた数々の作品を生み出し、音楽における芸術性を復活させたのです。(フランクと聖クロチルド教会についてはオルガン通信Vol.48をご参照下さい。)後半で演奏するフランク最晩年の遺言とも言える秀作『3つのコラール』は、バッハのオルガン作品を強く意識した作品です。「バッハが遺したようなオルガンのためのコラールを作りたい。しかしバッハとは異なる次元で」という言葉の通り、信仰心が集約された精神性の高いこの3つのコラールを完成させ、1890年に息をひきとりました。

♪20世紀初頭パリ、ベル・エポックとは♪

産業革命においてイギリスに遅れをとっていたフランスは、それに負けじと立て続けにパリ万国博覧会を開催します。1889年の万博に向けてエッフェル塔が建設、1900年には博覧会の会場『グラン・パレ』などが建設され、日本の陶器や日本画も展示されました。パリ万博では、芸術を中心に据え、音楽や絵画も含めて『芸術の街パリ』の印象を広く世界に打ち出すきっかけとなりました。この頃の文明開化に湧くパリを**ベル・エポック(良き時代)**と呼び、第1次世界大戦が勃発するまでの繁栄を表しています。巨大なオルガンが教会やホールに導入されていきました。



♪ベルギーとの意外な関係♪

フランクの死後、46歳でパリ音楽院教授の跡を継いだのが**シャルル＝マリー・ヴィドール**(1844-1937)です。パリ、サン・シュルピス教会のオルガニストを長年務めました。若い頃から才能を見いだされたヴィドールは、ベルギーのブリュッセル音楽院へ留学を薦められます。バッハの流れを汲む音楽家**J.-N.レメンス**から教えを受けるためでした。師・レメンスはバッハ直系の弟子ともいえるA.F.ヘッセのもとで学ぶため政府給付金を得てドイツへ留学し、26歳でブリュッセル音楽院の教授に抜擢される逸材としてパリでもその名を轟かせていました。そのレメンスの元で学んだヴィドールに、バッハ直系の息吹が注ぎ込まれたのです！パリ音楽院で教鞭をとるようになったヴィドールは、実技レッスンの中でバッハの演奏を積極的に取り入れ、ドイツの作曲家の音楽を積極的にフランスへ広めました。実際に、20世紀初頭のパリでの演奏会記録をみると、バッハが驚くほど頻繁に演奏されているのです！

♪ヴィドールが果たした偉業の数々♪

- 1872年から10曲のオルガン交響曲を作曲。フランスにおける『オルガン交響曲の父』と位置づけることができます。第9番目の交響曲はかの有名なベートーヴェンの『第九』に畏敬の念を寄せ、題名が重なるのを避けて『ゴチック』と命名しています。
- 1912年から、アルザス出身でバッハ研究家であった弟子シュヴァイツァーと共にバッハ曲集8巻を出版。この序文にはヴィドールによる演奏解釈の序文が添えられており、当時の演奏形態を知る上で大変重要な資料のひとつとなっています。
- 1925年に編曲集『バッハへの思い出』を出版。『マタイ受難曲』の終曲や『目覚めよと呼ぶ声あり』といったバッハの名曲をヴィドールがフランスのオルガンで美しく響くためにアレンジしたもの。その当時フランスは、オーケストラを模倣する様な表情豊かな音色を持つオルガンが主流で、このように整音された楽器でバロック時代の音楽の演奏をするには、色々な工夫が必要でした。そのような状況のなかで、フランスのオルガンでも演奏できるような『独特のバッハ演奏の伝統』がうまれたのです。
- 交響曲5番の最終楽章『トッカータ』は、今や世界中の結婚式で演奏されるほど有名な作品です。バッハのトッカータ二短調に並ぶオルガンの定番曲です。

その後パリでは、様々なオルガニストによって、バッハのあらゆる作品が、フランスのオルガンに合うような音色や音形を用いて編曲されました。ヴィドールの弟子であった**マルセル・デュプレ**(1886-1971)は、編曲のみならず、とても短い期間で10回にわたるバッハのオルガン作品全曲演奏会を行い(右絵はその時のちらし)、それをすべて暗譜で行いました！デュプレは当時の演奏スタイルに従った演奏法を示した、バッハ作品全集を出版しています。バッハのオルガン作品全曲録音はヘルムート・ヴェルヒャが有名ですが、フランスではその後ミシェル・シャピユイ、マリー＝クレール・アランらによってバッハの全曲演奏録音が度々行われ、その演奏は世界的に評価されました。フランスでのバッハ熱はさらに加速し、今に至るのです。



🍏早わかり！演奏曲目全曲一挙公開♪

★オルガン+フルート ☆フルートソロ それ以外はオルガンソロ

【前半のポイント】フランスからの影響を受けたバッハの作品を集めました。その他に、3曲目は前に演奏するバッハの『目覚めよと呼ぶ声あり』の、ヴィドールによる編曲バージョンです。フランスの息吹を浴びたバッハがどのように変化するか、バッハの原曲との聴き比べでお楽しみ頂きます。

1、J.S.バッハ：幻想曲ト長調 BWV 572

2、J.S.バッハ：目覚めよと呼ぶ声あり BWV 645

3、Ch.-M.ヴィドール：『バッハの思い出』より「夜警の行進」

4、J.S.バッハ：管弦楽組曲2番 BWV1067 からポロネーズとバディヌリ★

5、J.S.バッハ：無伴奏フルートのためのパルティータ短調 BWV1013 より抜粋☆

6、J.S.バッハ：パッサカリア BWV582

【後半のポイント】後半最初の3曲は、20世紀パリ、ベル・エポックのエスプリをフルートの音色も交えてたっぷりと。フランクのコラール2番は、パッサカリア（バス主題による変奏曲）の形式で書かれ、前半最後に演奏するバッハのパッサカリアに匹敵する優れた作品です。耳馴染みのカンタータ147番をデュリュフレがオルガン編曲した作品を間に挟み、最後は1879年にパリトロカデロ宮殿のオルガンのお披露目演奏会のために書かれたヴィドールのトッカータで華やかに幕を閉じます。

7、**L.ヴィエルヌ：太陽の讃歌**

8、C.ドビュッシー：シランクス☆

9、**J.アラン：3つの楽章** ★

10、C.フランク：コラール2番

11、M.デュリュフレ：カンタータ BWV147 主よ人の望みと喜びを

12、Ch.-M.ヴィドール：オルガン交響曲 第5番より、『トッカータ』

🍏フルート奏者の高木綾子さんのご紹介

たぐい希なキャリアにこの美しさ、世間

が放っておく訳がございません！国内外数々のコンクールでの優勝、若くして東京芸術大学准教授に就任され、その他洗足学園の客員教授をはじめ様々な機関で教鞭をとり、ご自身の演奏活動とともに後進の指導にも定評があります。クラシックのみならず、ジャンルを超えた幅広い表現力のもと、リリースされたCDは10枚以上、日本で最も実力と影響力のあるフルート奏者といっても過言ではありません。オルガン公演で、この超一流フルート奏者の高木さんの音色も聴けてしまうとは、やはり聴き逃す訳にはいきません！私の勝手なイメージで恐縮ですが、高木さんはまさに、スーパーウーマン！この輝かしいご活躍に加え、なんとなんと、3人のお子さまがいらっしゃるのです！音楽家としても、女性としても憧れの生き方をなさっている高木さんと共演できる嬉しいドキドキも高鳴ってまいりました。今までに沢山のフルート奏者の方々と共演させて頂いていますが、高木さんとバッハの世界、そしてフランスの近現代の音楽を共有できる事を今から楽しみにしております。どのような化学反応が起こるのか、どうぞお楽しみに！！



🍏フルートとオルガンのある重要な共通点とは？

私の主観100パーセントで恐縮ですが、フルートの方々はみ

なさん極めてスマートな風貌で（楽器が小さく、持ち運びも簡単）、旋律楽器なので他の奏者とのアンサンブルに長けている印象があります。それに比べてオルガン奏者は楽器を持ち運べないかわりに分厚い楽譜やオルガンシューズを抱えて楽器を渡り歩き、一人で多声を奏でられる事からソロでの演奏活動が中心です。このように一見全く性格の異なる木管楽器フルートと気鳴形鍵盤楽器に分類されるオルガン。実は大きな共通点があります。左の写真は、左からフルート、オルガンのパイプなのですが、似ていると思いませんか？そうです、オルガンはこのような笛（パイプ）の集合体なのです。私達演奏者は、いかに笛を美しく響かせるかを日々模索し、演奏に反映させていきます。今回のリサイタルでは、所沢ミュージズの75の音色と5563本の笛をもつパイプオルガンと一本のフルート、様々な笛たちの共演をどうぞお楽しみ下さい！



3月5日はぜひアークホールへ！！みなさまの沢山のご来場を、心よりお待ちしております！